九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

雅語俗録　壱

中野, 三敏
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/4755947

出版情報：雅俗. 1, pp.218-234, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

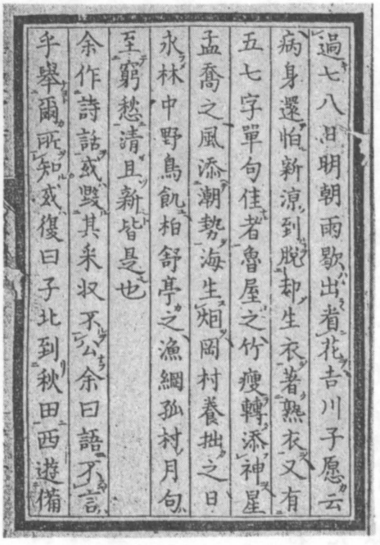
雅語俗録壱

中野三敏

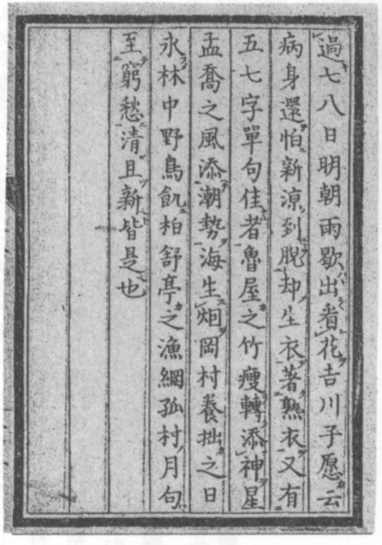
石井研堂氏、その著に題して曰く「雅三俗四」と。今その尾に附きて「雅語俗録」と題する者は誰そ、三敏居士なり。

一　『詩聖堂詩話』初篇の二本

何れも中本一冊。寛政十一年二月、下谷御成小路足利屋勘六（蔓延堂）板の一本は見返しと奥付あり、特に見返しの意匠は通常の例とやゝ異なって雅趣あり。また一本は見返し、奥付ともに無く、恐らくは前者は初印、後者は後印流布本なるべし。何れも本文は三十一丁迄を存するも、後者は三十一オの六行迄にて終わり、前者はなおその後に、更に一話、五行分を刻す。曰く、


過七八日明朝雨歇出看花吉川子愿云
病身還怕新涼到脱却生衣著熟衣又有
五七字單句佳者魯屋之竹瘦轉添神星
孟喬之風添潮勢海生烟岡村養拙之日
永林中野鳥飢柏舒亭之漁綱孤村月句
至窮愁清且新皆是也
余作詩話或毀其采収不公余曰語不言
乎舉爾所知或復曰子北到秋田西遊備

初印本31オ


過七八日明朝雨歇出看花吉川子愿云
病身還怕新涼到脱却生衣著熟衣又有
五七字單句佳者魯屋之竹瘦轉添神星
孟喬之風添潮勢海生烟岡村養拙之日
永林中野鳥飢柏舒亭之漁綱孤村月句
至窮愁清且新皆是也

後印本31オ

余作二詩話一或毀其采収不レ公。余曰、語ニ不レ言ハ乎、挙ゲ二爾ガ所ヲ知ル。或ハ復曰、子北到リ二秋田一ニ西遊ブ備中一ニ、所経歴スル二十余国、栲亭六如ノ諸人皆其所知ル也、豈止ニ于此一ニ乎。余又挙テ二小説之結語ヲ一告テ之ニ曰、且ク聴ケ二下回ノ分解ヲ一

江村北海、龍草廬、何れも宝暦、明和頃、同じことを言われて何となく評判を落せしこともあるに、さすが天民先生の受け流し方はたくみなもの也。これも時勢というものなるべし。流布本（『日本詩話叢書』第三巻所収本など）に削去りしは如何なる故か。

二　手柄岡持賛文三則

一日　福岡の出光美術館に「肉筆浮世絵展」を見る。出陳の一に「桜下美人図」と題して水野廬朝画絹本着彩の双幅あり。落款は何れも「文化丙子時風応需摯麟斎朝廬画斎麟」とあり、一幅は仲の町、桜の竹囲いの前に遊女一人と禿二人の立姿、今一幅は桜下に芸者二人の立姿を描く。二幅とも、その余白全体に墨筆散らし書きの長々とした賛文あり。ガラス越しに眼を凝らせば、岡持の文章を写せるもの。老眼、加ゆるにガラスの反射光に読みとれぬ所はそのまゝ□にして左の如し。

印

傾城に誠なきを憎むといへともその誠なきは傾城の傾城たる所にして楽しみ又ふかし／唯貞節なるをいつくしみて黒あはたをはなとなかめ引つりを月とあふきつゝ一生女房のかほをまもりつめてくらす□とのみならは傾城てふものは有へからす絵そらこと／といふもこれにおなしそのそらことなるは絵の絵たるところにしてなかめまた深し紅毛は窮理をたうとめる国にして山川草木人物気形宮室器財にいたるまて厘毛の割合を以てしてもの影燈火の影までを画きものとして其のりをこゆることなしといへとも人毎に蘭画を／翫ふにはあらす□□とありとていとふものならばとり□□探幽己來□画をもちゆる人はあるましきなりかゝるやまと歌も又しかり□□□□らるふつゝかに□□□□さまこそ／

風稚廼本意耳之天以登多宇止計麗／されはこの一軸にある美人を我妻ともてかけともおもひなくさまんにこれねたむひともなく／尻てふ物の來ぬる禍もなく物喰はする世話もなくもの着する気つかひもなく／しかも無病息災にして我身も又けそり〳〵と咳をせて愁はなかるへしかくのこりかたなくたのしきかすかた絵なからこゝろに／まかせぬことのたゝひとつあるへし穴賢／

右手柄岡持作文

文化十四年歳次彊梧赤奮若中呂念五日

応需　印印

印

凡道のものにあらさるを地ものと称することかんつかたのことは恐あれは云はす中人以下をかそふるに御新造お娵こむすめ子内方御内儀おかみさんかゝあ左衛門山の神後室／後家衆姑婆々お嬢様としいふも地ものゝ実生へにして宮つかへのうへをいはゝおつほねおめかけお乳母とん腰もと小あま下女はした惣してさんすりいすおつすおす見ねへ／聞ねへといはさるをもて地もものとはいふなるへし又芸者といふものいにしへは躍子とよひしか葛西のはあさまほともおとることはしらす唯うた浄瑠璃三味線をふつつかに喰かちりたれはいまは芸者とのみとなへ又は者と斗もいへり花のみやこ梅の難波にては舞子芸者と／二くさにわかてりこの芸者すかたは地ものに似て／ころふときは傾城に似たり通人の茶漬の菜となりて是を地もの似ころはしといふ／爰に又頭は娘尾は女房足手は下女のことくにて啼声呼出にはたるものありこれを地こくといふ地ものゝ極品なれはかく名つけしといふ／といふ説あり或人のいはくちこくといふも又道のものなりいかんそ地ものゝ極品といふにあたらん／和連古連仁古多辺天以波久地獄御尤　手柄岡持文章

この長たらしさだけでも、岡持の文章に紛れもなけれど、岡持は文化十年に没するゆえ、その遺文の画題に即せるを撰み文化十四年に賛と為したるは誰なるか、前文末尾の二印はその人の印なるべきも読めそうで読めず。これもガラスの光りのせいになすりつけおくべし。

廬朝の墓は、先年浅草徳本寺（東本願寺塔中）に宋紫

石の展墓を試みしに、同じ墓域にあり、遺品も伝わるよしなり。

もう一点は、ホノルル美術館蔵、初代豊国画、遊女図に着賛のもの、これはまた写真を見せて戴いただけなれど、厚かましくここに記す。

朝東亭

北州に鬼あり其母晦日の月の前に四角なる卵を呑と夢見て／此鬼をうめり名つけて阿異卵といふ此おいらん筆なうして／書き剱無して殺すかくに口を以しころすに手を以す大通を／かいて野暮となし野暮を殺して大通となす情の厚きこと／諏訪湖の氷の如し終に灯とけてはまるへし情の深きこと飛／鳥川の渕の如し終に瀬となりて照れつへし／画師の工絶妙なりといへとも幸に神魂を画くことあたはすもし／此おいらん神魂あらは此書を見て此書を見て知つた歟と云はん／手柄岡持

題岡持

こちらは紛れもなき岡持自筆なり。

三　彦麿の家族

季鷹門にて、京伝や武清とも友達づきあいゆえ、たゞのうるさがたではすまぬ国学者斎藤彦麿の古稀賀会は、二年繰り延べて天保十年三月日吉山王社内宝蔵院に催され、集められた賀歌は兼題の春曙をそのまゝ外題として板に上せた。大本一冊、「春の明ほの」と記す大ぶりの題簽。巻頭、榊原侯越中守源照成の序と彦麿の序、その後に半丁、雅園の配り物の栞の絵を附し、内題には「天保十年三月十三日於山王社内宝蔵院賀宴　但去八年古稀延会」とあり、刊記、奥付の類は無し。彦麿序にいう。

外戒国人の古希稀なりといひし七そぢのよはひに充ぬる人はわが皇大御国にてはめづらしからぬを世のならはしなれば賀の宴すべく子ら孫らさらぬわかうどどもがこぞりあひていひさわぐをいかで人並にさることせんをこにもこそとゆるさぬをあながちにそゞのかすにすまひかねて陸奥二本松の殿の君に仕へまつる我次郎

なる大内信利三郎なる宗形直路がりいひやりてかの国にありときく無難木とかいへるにて栞だつもの造らせて家なる女ゆき子をして紫の組紐うたせ總角結び垂ていともかしこき君たちよりはじめてをしへ子のかぎり配ものしつるは二百ひらあまり五十枚になんあまりける絵は我弟にて備後福山の殿の君に仕る村片相覧かきて歌はみづから鈍き筆もてかけり

をとつとしのうたけさはることありてことしの弥生になんもよほしける

天保十年の春　あしのかりほの主人　洛陽花老人

還暦だの古稀だのの賀宴は、この比にても一応は遠慮するのが通例らしきは、あの彦麿のことだけにおかしきも、彦麿と絵師の村片相覧の兄弟なることはあまり知られていなかったのではないか。巻頭、縁者の詠歌をまとめあるによって、彦麿の家族構成を述べる。妻女はしか子、長弟は萩野隆伯源千鷹、次弟は村片相覧源武邦、長

「柳　花　集」

男は会主の一郎左ェ門藤原豊啓、その妻、ふさ子、二男は大内新右ェ門多々良信利、三男は宗形治太夫直路、長女はゆき子。相覧の歌は、

おほつかな常にみなれし山のはも霞にしつむはるの曙

ついでに相覧の年令も、栞の絵に「愚弟　六十二翁　相覧」とあり、丁度彦麿と十才違いと知れる。相覧は江戸後期には珍しい土佐派の絵師。『日光山志』の挿絵の外、好古癖を示し始めた江戸狂歌絵本や摺物に、銀泥などを多用した、上品だが軟らかみある好ましい挿絵をしば〳〵見る。鈴木其一と共に画く吉原狂歌本『柳花集』（天保八年刊）や、歌仙絵風の姿絵を画いた『三玉集』など。

四「降るあめりか」の出所

「露をだにいとふ大和の女郎花ふるあめりかに袖はぬらさじ」の歌は攘夷運動の応援歌として人口に膾炙せしも、扨その詠み人はとなると、巷説には横浜岩亀楼の喜遊、吉原松葉屋の花園、同じく吉原の桜木と三人もあり、しかも吉原に桜木という遊女は安政五、六年には六人、翌万延元年には十人もいて、誰が誰やらわからぬというのは、御丁寧にも細見を繰って調べられた三田村鳶魚の報告だが、結局鳶魚は大橋訥庵の偽作という巷説に信憑性ありとする説に落着かれしものの如し（鳶魚全集、第廿巻）。この歌が方々へ伝えられたのは、大方文久二年以後のことであり、その出所は鳶魚によれば、『温古見聞彙纂』（写本）『伝聞叢語集』（写本）『絵本近世義人伝』（刊本）などいう雑録類で、その成立年時や刊年も殆んど不明、みな明治に入ってからの書き留めなるべしという。いまその刊年を明記したものに出くわした。明治巳巳（二年）刊の『振気篇国風』に頼三樹、吉田松陰、梅田雲濱等のスターに並べて、

櫻木

江戸吉原ノ娼婦也。安政年間墨夷某幣レ之。櫻木斥ケ不レ応。夷缺レ望語ル二執政某一。執政某重ジ二夷意一属二

諸ヲ其主ニ。櫻木固ク不レ聴、咏シ国風ヲ述ブ其意ヲ云。冗史氏ノ曰。櫻木者一賤娼婦而已、然而不ル屈セ権勢ニ如レ若。其持操雖ニ大丈夫ニ不レ愧也。嗚呼彼ノ如キハ執政ノ何ン為ル者ソ。身立チ政府ニ行ヒ天下之大事ニ、而阿リ夷虜ニ為ス娼婦之媒介ヲ。実ニ狗鼠不レ食ハ其餘ヲ丐。

と盛に慷慨の気をあおった末にその歌を引く。『振気篇』は国風部一冊に詩文部二冊の中本全三冊。帝尨山人原輯、春荘冗史補輯とあって、京坂三肆の相合板になり、倒幕派の威勢に乗じて大いに売れた本であることは、和本でさえあれば何でも万の値札をつけることに馴れた田舎の本屋でも、いまだに千二百円などと内輪な値付けをすることでも十分推しはかり得る。帝尨山人、春荘冗史は共に未詳。

五　黄表紙仕立の地口絵本

国会図書館蔵の『口まめ鳥』一冊はしっていたが、か

「口まめ鳥」

なり痛んだ、しかも補写などのあるもの。いまその原装の善本を見、同時に全く同体裁の『口も八調』なる一本も知り得たので忘れぬ内に記す。『口まめ鳥』は中本一冊の十丁モノ。表紙は無地に淡い梔色で上半分に寿字を諸体に書きわけた文字五つほどを散らし、下半分は菊花の大輪を散らす。中央に単枠を施して「くちまめ鳥　完」と、これも枠ごと梔色で摺り付ける。柱記は「地口」。本文は各半丁を中央に横一本の界線を入れて上下二コマとし、それぞれのコマに地口一句を記してその句意を描いた絵を施す。最終丁裏半丁は「地口本文じゅんのごとく合見るべし」とあって、やはり上下二段に地口の本文を列記しているので、地口そのものは九丁半の二コマづつで三十八例となる。地口とその本文を記しておく。

雑煮がかたくて歯がたつものか
　鬼になたとてはらたつものは
京染色ざし小判が出る
　京ばし中ばし御まんがべに
雨降一俵米つかす
　かせぐにびんぼうおひつかず
巨燵で小便ほしたいな
　そば切そうめんくひたいな
小僧出せさいせんの銭
　五丁まちさいけんのゑづ
さくらの花に萩こゝまりします
　たかまがはらに神とゞまります
菊寿はすきなり縫はよし
　下ぢはすきなり御意はよし
四百の釜をかけまする
　ちはこの玉をたてまつる
鷹はける〳〵うづらはこまる
　さかはてる〳〵すゞかはくもる
姉ぶってしかられる
　雨ふって地かたまる
一生の無心に帯を買せふ
　一寸のむしに五分のたましい
なまけ茶臼の挽下手
　はなし上手のきゝ下手

色おとこには福來る
　わらふかとにはふくきたる
左官の泥鏝で二タ間ちょっくりぬってやれ
　茶わんのかけであたまちょっくりはってやろ
御井戸を出して寝てゐるかゝさま
　御江戸をたって廿里かみがた
才藏は來年をかへり見ず
　大こうはさいきんをかへりみず
一つふくのむ間に蚊が這入た
　ぶんふくちゃがまに毛がはへた
金屏風の賣口にまつりがすぎて残念だ
　さんごうじのきんちゃくに御さるが付て三文だ
干鱈はつもの喰せぬか
　卯はらたつものとらせなか
組んだる手がらに猪の早太
　ふんだんだるまのゐんの下
はらたつつまのつぎ〳〵の袖
　わがたつそまにすみそめのそで
唐茄子があまった午房まであまった

　正月がござったどこまでござった
うぐひすこま鳥花をすく
　あないちこまどりはねをつく
あふぎや花あふぎかたるにおちる
　とふにやおちいでかたるにおちる
くるまでゐざり山坂なん所
　こゝまでござれあまざけしんじょ
生酔の寝たに勢はなし
　やなぎのえだに雪おれはなし
壱歩の浴衣親和ぞめ
　一ふじ二たか三なすび
とうぐわんから小菜が出た
　ひやうたんからこまがでる
上布御好身はれ着にならぶ
　上しのおもむくよのぎにあらず
なづなうる子に芹松露
　あつまおとこに京女郎
鷲の衝立に鳶書て下さい
　足のつめたにざうりかって下せ

飯櫃の蓋はあれどあぶり籠と平がない
　ぬす人のひまはあれどまもり人のひま
小豆餅五つようかん七つ
　御月さまいくつ十三なゝつ
鱈を三本せいぼにしやれ
　とらも半ぶんけをむしられ
細刀のわきざし牡丹のほりもの
　おさめのついたち小ばんのまきもの
一ト間に立し大燭臺
　ゆしまにかけし松竹梅
瘡ぶたあたま疱瘡のよりか
　なゝくさなづなとうどのとりと
傘おちて下駄に疵
　たら〳〵おちておちやのみづ

もう一本『口も八調』も全く同じ表紙模様に、中央外題は「口も八調　完」とあり、本文は、こちらは各半丁中央に縦の界線を入れて縦の二コマにコマ割りをして、同じく九丁半で三十八例、こちらも全部を転記しておく。

口も八調

鼓 才藏がうつて腹筋となる
すゞめ海中に入てはまぐりとなる
馬乘三人徒士八人
もゝくり三年かき八ねん
とうまるはらんだ又産んだ
なうまくさまんだばさらんだ
狗張子は雛から賣れる
実のなる木は花からしれる
鳩はむねよりたゞ梟
人は見めよりたゞこゝろ
洗濯だらい垢おとし
おんやくはらひやくおとし
小袖櫃をぶつ付たら錠まへ直そ
一つぼしを見つけたら長者になろぞ
鞠の蓋とりや無いと云て笑つた
こいのたきのぼりはなんといってのぼった
とんびとさぎはと鳶とんだ
ゆんべも三百はりこんだ
餅なくてさがおこしになる

うぢなくて玉のこしにのる
娘ひかりて稽古所這入
うしにひかれてぜんくはうじまいり
土橋いもとを権二がさらって
おやぢぬのこをとんびがさらった
たばこをのんで五匁かはしよ
あの子をうんでおまんにだかしょ
きのふの飯であすはたくまい
むかふのいしであたまあぶない
爺があたまの日あたりよりも
しゅすのはかまのひだとるよりも
割たら香炉の直がさがつた
あつたらおとこにおがさがつた
茶屋て転はちょっくりと寐る
ついにこのみはとっくりとなる
尾久から田圃を転ぬやう
なむからたんのふとらやアやア
障子の外から腰張はがして
十九のとしからとしまにはまって

中洲のすゞみも今のうち
たかいもひくひもいろのみち
墨筆に文台直さふ
その舟にびんせんまうさふ
緋はかた大通おびにした
むまかたせんどうおちの人
旦那祭に出た物すき
はんだはをりにぎだもゝひき
質に轉多をとるまいか
一にたわらをふんまいて
御難ぼたもちに百がさとうはりこんだ
おにんまたぐらにかくべいしゝがまいこんだ
金の目貫にこんな鍔
ひんのぬすみにこひのうた
茄子漬たに胡瓜買て下さい
足のつめたにざうりかって下さい
弐朱の色きやく御旅でほれる
ふじのしらゆきはあさ日でとける
下馬さきの御供にやおでんかうれる

今どきのこどもにやゆだんがならぬ
袴地に茶丸買やれ
やかましかやくはんかぶれ
筆のぶんまはしも太鼓の絵図
そでのふり合もたしやうのゑん
裾つぎ行ば船頭來やふ
一トひきひけばせんぞうくやふ
番太郎夜のうちよく出ぬ鉄棒
ぼうさま山みちやふれたころも
五連鰹節とんだ気に入
ぐにんなつのむしとんで火にいる
さかつき銚子はいる道具
おかざき女郎衆はよい女郎しゆ
防風かって銭を出し
まほうきいて下ぢをなせ
鹿の子もち五つくわれし咄あれど
からころもきつゝなれにしつましあれど
笠紐は二つの足しに縞ですする
わがいほはみやこのたつみしかそすむ

同じ模様の同じ仕立てで、本文の画師も恐らく同一人か、多分何年か続けて出したものなるべし。画師の署名は二本とも無いが、まぎれもない重政風。そこで国会本には後補の題簽に後人の手で、「京伝画作」と記すのは、恐らく旧蔵者浮生亭（朝倉無声ナルベシ）の所為、しかもその上を覆った鞘表紙の書題簽には、同じく「京伝画作」と記した上に四角く貼紙をして、「北尾重政」と墨書し、更に御ていねいにもその上から墨で棒線を引いて見せ消ちとする。要するに京伝（政演）か重政か何れと決め兼ねての処置であることは言う迄もない。刊年も何もないが『小説年表』には『口まめ鳥』のみ記載されて天明元年板とするのは妥当な所か。ただし『口も八調』の地口に「中州のすゞみも今のうち」とあるのが、寛政元年の中州取払いが噂にのぼった事を指しているものとすれば、少くとも『口も八調』の方は天明末年の出来ということになろう。

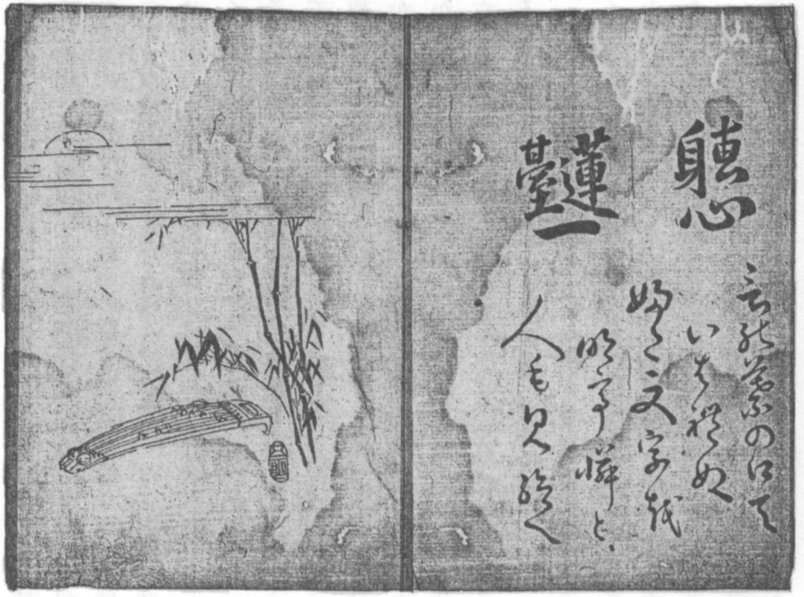
『口まめ鳥』に見える地口で「才藏は来年年をかへり見ず」と「唐茄子があまった午房まであまった」は寛政六年刊、京伝画作『絵兄弟』に何れも「鐘下点」の地口として引かれる。鐘下は安永頃から夢仏、十寸尾、志夕等と並んでよくその名を見る雑俳点者の一人で、五文字折句集『相合袴』には、住所を「柳原土手下龍閑町中ほど」とある。当時は、折句、五文字段々等の雑俳と共に、地口やもじり或いは謎付けの点取りも盛んに行なわれていたのは、例えば京伝の『總籬』に「けいせいにもいろ〳〵なくせがあるものだ。歌ぎくが地ぐちのてんとり」などとあったり、南畝の「日ぐらしの日記」（『四方のあか』所収）に牛込肴町の住人で、雑俳点者で物は付けの点者を兼ねる者の噂が出たりすることでも明らか。その地口の点例そのものも、以前紹介したが（「江戸の遊里」集英社版『図説日本の古典』第18巻所収）、都立中央図書館藏の「江戸名所図」と仮題する江戸岡場所図一巻の絵半切がまさにそれである。とまれ『口まめ鳥』『口も八調』の二書も恐らく、鐘下などの点者による地口摺物の黄表紙仕立てといった所で、数年続けて板行されたものではなかったか。地口本の洒落本仕立ては早く上方の口合いに『穿当珍話』（宝暦六年刊）あり、江戸に移っては『軽口鸚鵡盃』（安永二年板）あり、全丁絵入りの

もぢり集『筋離文字理』（安永頃板）等があった。そこでもう一つ趣向をかえて黄表紙仕立てと出たものであろう。

但し、そうなると赤本の頃から地口本があるし、上方には半紙本の子供絵本類にも多いし、この類のルーツ調べはなかなか手ごわい。

六　わけのわからぬ本

題簽は子持枠の短冊簽に「真面目物かたり」とあり、何の変哲もない薄茶表紙の半紙本一冊、全部で十一丁しかない薄冊だが、扉に、「春夜夢」の大字三字を書いたのは、関防印や落款印には「五明」「華扇」とあって、書風も、竹清老に「日ましの千歳飴」と悪口された例の東江流の行書の、まぎれもない五明楼の花扇筆。その裏丁には、上部に何とも読み兼ねる「懇」「蘭」の合字二文字を置いてその下に「言の葉の口ていはれぬふた文字を明て憐と人も見給へ」の歌も又、同じく花扇の書であることは書体でしれる。次の丁は表から裏へ続く絵で表



丁は竹林に琴一張、裏丁は唐机の上に硯に筆筒に扇子、下に開きかけの巻紙、落款は「五明楼瀧川写」とある。ともかく扇屋のお職二人に巻頭を飾らせたこの本、只物とは思はれぬ。次からが本文で、内題も何もなく、本文また「宇家良かいほ／新倉松陰著述」と二行、すぐ続けて「寛政六ツのとし／みな月日／江戸通油町／蔦屋重三郎板」と刊記を記す。本文には挿絵も何もなく、柱記もない。丁付は本文の柱にのみ「一」から「八」迄で最終丁にはなし。

実はこの本、国会にも東博にもあって、国会本は、「春雨徒然草」、東博本は「狂文春夜夢」とそれぞれの藏書目録にはあるが、何れも題簽を欠く為に扉の題字に拠る仮題であることは言わずと知れる。しかも東博本は巻末の書肆名部分を墨格のまゝ彫り残してある。寛政六年六月といえば蔦重は改革による処分からようやく立直り、写楽を使って新機軸を打ち出そうとしたばかりの所である。何も名前をはゞかる所は無い筈。一方新倉松陰とは聞きなれぬ名前だが、肩に「宇家良かいほ」とあり、本文中にも「武さし野のうけらか花の我なれば咲くとも

などか人のしるへき」の詠がある。とすれば、これは橘千蔭の隠し名と判断するのは当然のことか。千蔭は寛政の改革の初発時に、在職中の勤め方不届という事で、他の不良御家人とひとしなみに五十石減俸、百日閉門を仰せつかっている。本気で国学に志したのはそれかららしく、閉門中に『万葉集略解』の著を思い立ったという。それ以前の千蔭の遊蕩ぶりはかなりのものだったようで、五明楼扇屋の主人墨河や妻女稲木なども、書は千蔭門で、抱への遊女も花扇は東江の、瀧川は千蔭の門人にしたほか吉原にも門人は多かった。その為の閉門かどうかはわからぬが、やはり吉原関係には聊か神経質になって寛政六年になっても隠名を用いる位の事はありそうにも思える。

肝心の本文の内容だが、これが何ともわけのわからぬもので、弥生の末つかた浅草に遊んだ主人公が遊意を動かして吉原へおもむき、とある妓楼の前へ出る。「いかなる人家にてか侍らんと言入けれは、五明楼とそおしへける。扨あるじの長は花扇の君とぞいうなる。去ころ江戸何某より得たる春興帖のふみの序を書ぬるそのあるじ

にてぞ有ける。いかにもして扇など参らせて一筆の恵みにあづからばや」と思い煩い、大門外の店へ行き安物の扇を買求め、「情ありて筆のゑにしの有るなればそれよ扇の新枕とそしる」の歌を認めた紙を巻きつけて、再び五明楼にとって帰り、格子先から差し込んで花扇へ取次をたのみ、とつおいつ待つこととしばし、中から禿が使に立って花扇染筆の扇を渡す。開いて見れば『唐詩選』中「竹裏館」の一句が丁寧に認めてあった。おし載いて猶逢いたさは山々なれども懐のはかなさを恨みつゝ、胸中を二、三の歌に託してやがて帰途につき、浅草寺に花扇の為に法花を進らせて、やがて「情ある君がためとてみそぎして猶末広ふふしあふぐなり」と詠んで梵字に記し、陀羅尼を誦するかと思へば、すべては春の夜の夢であった、その始終を駒形堂前の薪木屋某の二階をかりて書きつけたという。

とりたてて、何かの事件が寓されている様子もなく、花扇の宣伝文としても今更らしい。扇屋の花扇は宝暦から文化末年迄続いた御職名で、天明五年、三代目の花扇は旗本安部式部と心中、その後の四代目は孝女の聞え高く、（『烹雑の記』）、又能書家としても有名で寛政二年には待乳山の碑を書いた。『傾城觸』の花扇もこの四代目であり、本書の花扇もまさにその人である。手元の細見では寛政二、四、五年と花扇、瀧川共に見えるが、肝心の寛政六年の細見が無いので、何とも言えぬが、巻末の「情けある君がためとて」の歌をわざ〳〵梵字で書いて片仮名の振仮名がふってある所、また巻頭合字の二文字などを見ると、或いはこの四代目花扇が寛政六年に亡くなって、その追善の草子というのかもしれぬ。或いは又、始終扇にこだわった書きぶりから推して、単に五明楼の為の宣伝の草子なのかもしれぬ。それにしても、何で隠し名迄使って千蔭が出てくるのか、またつけようもあろうに「真面目物語」とは、等々、何ともわけのわからぬ本ではある。

七　春海と金峨

千蔭とくれば春海となるのは人情だが、さればとてハッとするような材料もない。井上金峨の『匡正録』（安永

五年板）を見ていたら門人篠本竹堂の序があって、本文の首に金峨自身の序のような文章があるが、その中に

近者就平士観借其所藏之書、縦探厨中則二書（「刊謬正俗」と「斥非」をさす）存焉。因持帰讀之、竊不自量效其所為、聊録所見未満二旬得四十有余條（中略）及還二書於平氏并与贈此亦使士観一論之耳、豈敢際之大方乎。安永乙末（四年）夏六月朔　金峨井純卿

とあった。平士観、即ち春海である。森翁の「村田春海」には、その漢学の師として鵜殿士寧、服部仲英、その詩友に安達清河といった蘐園の諸家を挙げるが、一方で金峨とも善かったことは識されていない。安永四年は金峨四十四才、春海は三十才、やゝ年は違うが兄事したとしてよかろう。金峨にとっても富家村田家の存在は藏書の借覧のほかにも何かと便利ではあったらしい。匡正録四十七章、学者の時俗通弊をついて極めて鋭い。金峨といえば必ず徂徠批判の痛烈さが言われるが、実際には伊物二氏の功と賜については大いに認め、たゞその末流の弊を痛撃するものであることは、この書を見ても良くわかる。春海に対してもそこが言いたかったのであろう、中に一条、近人の詩文集を刊行する者、その序引を見れば必らず「師之所不許而弟子竊刻之既成然後告之」とか「奚以斯区区者為門人強請之」とか「平日不留稿散逸大半」とか一律同口に記すのは見苦しい。自著の刊行はもっと堂々とやれとハッパをかけているのが金峨らしくて痛快。

沢田東江が金峨の念友らしく思はれることは拙稿「東江伝」にもふれておいたが、その東江作の「吉原大全」に漢文の序を撰した酔郷散人も多分春海かと思う。